

(1) 小学部一般学級の取組

(1) 取組の概要

本学習グループは平成23年度から3年間、授業づくりを中心に取り上げ、子どもの教育的ニーズをベースに教師一人一人の意見や思いを引き出した授業づくりシステムに関する研究に取り組んできました(2013 荒尾支援学校研究紀要第22集)。それにより、子どもたちの「育てたい力」をどのように育むのかという共通の視点に立って、生活単元学習の在り方を再考し、教育課程編成に関する教師の意識が「従前の踏襲」という発想から教育的ニーズやキャリア発達、系統性、発展性という意識に変化しました。

小学部段階は生活にかかわる基本的スキル獲得の時期です。また、読み書き計算といった学習の基礎となる知識技能の獲得が期待される時期でもあります。そこで平成26年度より、前研究成果及び課題を踏まえ、各教科等を合わせた指導に偏っていた教育課程を見直し、教科別の指導の充実を図りました。各教科等を合わせた指導と教科別の指導を関連付けながら教育課程を編成することで、勤労観の育成につながり、そして、将来の自立と社会参加につながるものと考えます。

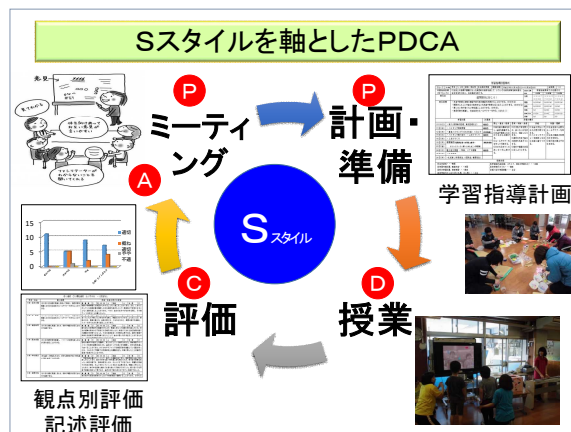
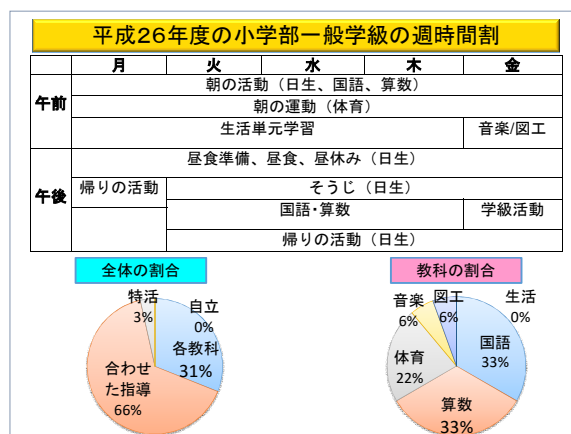
ただ、これまで積み上げてきた教育実践も踏まえつつ、子どもたちのキャリア発達を促していくには、どのように授業内容を整理し、いつ、何を教え、どのように評価していくかという焦燥感と授業準備への負担感が危惧されました。

そこで、Sスタイルによる授業づくりシステムのツールと、これまでの研究成果であるミーティング手法、そして新たな指導計画案を組み合わせることで、教育的ニーズに沿った学習内容や授業時数が整理でき、子どもの実態に合った幅のある学びや、キャリア発達を促すことができるのではないかと考えました。このSスタイルを授業づくりの軸とし、計画から授業、評価、改善に至るPDCAサイクルにより、ARRA・SHIの教育プログラムの構築をねらいました。

(2) 取組の内容

ア Plan(計画)

Sスタイルでは本校の教育目標を達成するために、小学部6年間で「育てたい力」を「かかわる」「きめる」「はたらく」視点から3つに整理しました。そこから各学習における「育てたい力」を学習指導要領に示された目標とリンクさせ、具体的指導内容をそれぞれに設定しました。授業が始まる1ヶ月前を原則として、月2回のグループ研究会にてミーティングを開き授業づくりを行いました。ミーティングではホワイトボード・ミーティング(以下、



W・M)の手法を主に用い、ファシリテーターが教師全員の意見を拾い上げながら、情報を一本化しました。W・Mでまとめた授業構成を、新たに作成した「学習指導計画様式」(資料4)に落とし込み、単元目標及び評価規準、学習内容、日程等を明記し、個別の指導計画と関連づけて個別目標を設定しました。

小学部段階におけるキャリア発達

かかわる	人間関係の基盤形成：人とのかかわり・集団活動・意思表現・あいさつ
きめる	身辺自立の確立：目的行動・自己選択・振り返り・習慣形成
はたらく	主体的に取り組む生活意欲の向上：関心憧れ・身近なきまり・はたらくよこび

生活単元学習年間指導計画(H27年度)

小1	小2	小3	小4	小5	小6
指導目標 ○生活上の目標や課題に沿った集団的な活動を通して、いろいろな役割体験を積み重ね、主体的に活動し、生活意欲を育てる。					
育てたい力 か：集団活動に参加し、友達や教師のかかわりに応じ、自分の気持ちを表現し、協力することができる。また、見守り、見守られることを受け止めることができる。					
前期	単元名	単元目標	内容	主な内容	育てたい力
4	みんなであそぼう	友達や仲間と一緒に遊ぶことが、自分の成長につながることを知り、友達や仲間と協力して遊ぶことができる。	1. 友達や仲間と一緒に遊ぶこと 2. 友達や仲間と協力して遊ぶこと	・友達や仲間と一緒に遊ぶこと ・友達や仲間と協力して遊ぶこと	・「あそび」 ・「あそび」 ・「あそび」 ・「あそび」
5	運動会	友達や仲間と一緒に遊ぶことが、自分の成長につながることを知り、友達や仲間と協力して遊ぶことができる。	1. 友達や仲間と一緒に遊ぶこと 2. 友達や仲間と協力して遊ぶこと	・友達や仲間と一緒に遊ぶこと ・友達や仲間と協力して遊ぶこと	・「あそび」 ・「あそび」 ・「あそび」 ・「あそび」
6	低学年単元	友達や仲間と一緒に遊ぶことが、自分の成長につながることを知り、友達や仲間と協力して遊ぶことができる。	1. 友達や仲間と一緒に遊ぶこと 2. 友達や仲間と協力して遊ぶこと	・友達や仲間と一緒に遊ぶこと ・友達や仲間と協力して遊ぶこと	・「あそび」 ・「あそび」 ・「あそび」 ・「あそび」
9	地域の生活を学ぶ	地域の生活を学ぶことが、自分の成長につながることを知り、地域の生活を学ぶことができる。	1. 地域の生活を学ぶこと 2. 地域の生活を学ぶこと	・地域の生活を学ぶこと ・地域の生活を学ぶこと	・「あそび」 ・「あそび」 ・「あそび」 ・「あそび」

図画工作年間指導計画(H28年度)

小1	小2	小3	小4	小5	小6
指導目標 ○初歩的な造形活動によって、造形表現についての興味や関心をもち、表現の喜びを味わうようになる。					
育てたい力 か：造形活動を通して、友達や教師のかかわりに応じ、自分の気持ちを表現し、協力することができる。また、見守り、見守られることを受け止めることができる。					
前期	行事	題材名	時期	主な内容	観点
4	運動会	①「あそび」 ②「あそび」	1 2	・友達や仲間と一緒に遊ぶこと ・友達や仲間と協力して遊ぶこと	A, B, C, D
5	運動会	③「あそび」 ④「あそび」	3 4	・友達や仲間と一緒に遊ぶこと ・友達や仲間と協力して遊ぶこと	B, C, D
6	運動会	⑤「あそび」 ⑥「あそび」	5 6	・友達や仲間と一緒に遊ぶこと ・友達や仲間と協力して遊ぶこと	B, C, D
9	運動会	⑦「あそび」 ⑧「あそび」	7 8	・友達や仲間と一緒に遊ぶこと ・友達や仲間と協力して遊ぶこと	A, B, C, D

音楽学習指導計画(H28年度)

学習指導計画様式			
グループ	小1	学年	音楽
期間	平成28年9月13日(火)～10月25日(火)	全学年	10
年間指導目標 (育てたい力)	か：音楽を通して友達や教師とのやりとりを楽しむ。協同する喜びを感じたりすることができる。 き：いろいろな音楽に触れ、音楽の面白さやよさ、美しさを感じ取ることができる。 は：身の回りの音に親しみ、生活の中で音楽への関心を高める。		
題材名	「ARA・SHIまつりで発表しよう」		
題材目標	音楽表現2-3/身体表現2-3 音楽表現2-3/身体表現2-3 音楽表現2-3		
評価規準	関心・意欲・態度 ：音楽や楽器等に興味を示し、自分から音楽表現に取り組むことができる。 思考力・判断力・表現力 ：歌や楽器の特徴を感じ取り、音や声で表現しようとする。 技能 ：見本(人や楽器等)に合わせて、楽器の特徴を捉えたりしながら取り組む。 知識・理解 ：表現の方法や体の動かし方、リズムの違いを意識して取り組む。		
主な育てたい力	《かかわる》 楽しみ・人とのかかわり・集団における活動 《きめる》 目的に向かって・自己選択・振り返り 《はたらく》 関心・憧れ 身近なものへの関心・身近なきまり・はたらくよこび		
学習指導要領の目標	具体的内容 ○表現及び鑑賞の活動を通して、音楽についての興味や関心をもち、その楽しさや楽しさを味わうようにする。		
全体歌唱「きみのこえ」	全体 グループ	楽器演奏 「おもてやん」グループ	アッコちゃん ラッキーちゃん マジャック 1組
評価規準	関心・意欲・態度 ：音楽や楽器等に興味を示し、自分から音楽表現に取り組むことができる。 思考力・判断力・表現力 ：歌や楽器の特徴を感じ取り、音や声で表現しようとする。 技能 ：見本(人や楽器等)に合わせて、楽器の特徴を捉えたりしながら取り組む。 知識・理解 ：表現の方法や体の動かし方、リズムの違いを意識して取り組む。		
評価基準	4:十分達成できた (75%以上) 3:概ね達成できた (50%～75%) 2:あまり達成できなかった (25%～50%) 1:できなかった (25%未満)		
学習計画	略案	評価日	MT
9/13(火) 導入・全体練習①	①		多田
15(木) 全体練習②・グループ別練習①			森
21(水) 全体練習③・グループ別練習②			福田
28(月) 全体練習④・グループ別練習③			森
10/4(火) 全体練習⑤・グループ別練習④		評価①	多田
13(木) 予行練習①			福田

年間指導目標

学習指導要領を基に目標設定

評価規準

本単元における「育てたい力」の明記

学習指導要領「音楽」の内容の観点を基に具体的な学習内容を記入

評価規準及び評価基準を明記。別シートにて個別指導目標を記入。

学習日程と評価日等を明記。中間評価と単元後の評価を行う。

教科別の指導では、国語や算数を主に個別学習で構成し、生活や図画工作、体育は一斉授業で取り扱いました。音楽に関しては、平成28年度より熊本大学教育学部藤原准教授との共同研究に取り組み、実態に応じたグループ別編成による授業を行いました。

国語・算数

生活

図画工作

体育

音楽

○学習指導要領に示された目標と内容に照らし合わせて授業内容及び授業時数を配当し、知識や技能が断片的にならないように系統的・発展的に計画し、生活に結び付けていきます。

日常生活の指導では、実践的で必然性のある活動を中心に、週時程表には帯状に設定し、繰り返しの指導を行いました。生活単元学習では、各教科の特徴を踏まえながらも、教科を教えるという意識ではなく、「生きる力」の育成に結びつくように留意しました。12月の発表会単元では、これまで出し物を学級ごとに発表するスタイルから、各教科等で学んだことを発表するスタイルに変更し、自己評価や他者評価を直接的に受け、自己有用感、そして次の学びへとつなげることができました。

日生(給食)

日生(掃除)

生単(地域の先生)

生単(宿泊学習)

生単(発表会)

○教科別・領域別の指導と相互に関連させながら、子どものもてる力を引き出し、伸ばす。子どもが主体的に学びながら、日常生活や社会生活につながるようにします。

ウ Check (評価)

(ア) 子どもの学びの評価

前述の学習指導計画様式に組み込んである観点別による評価を行いました。評価基準から数値化し、グラフに可視化しました。また、文章表記にて子どもの学びの様子や課題等も挙げ、子ども一人一人の評価を蓄積していきました。「できた。」「できなかった。」ではなく、どのような学びの変容があったのか、授業のどの部分が深まったのか、その子の「育てたい力」がどのくらい育ったのかを可視化することで、次の授業、次年度へのつなげることができました。

(イ) 指導の評価

評価

子どもの学びの評価(体育)

学年・氏名	個別目標	支援・配慮点	授業単元の学習評価			
			国	算数	理科	体育
1年 Aさん	か：教師の呼びかけに丁寧に 取り返すことができる。 き：自分の順番まで待つた り、ボールを転がすことが できる。(2) こ：歯を磨き、きり動かし、 目標に沿った動きができる。	奥になるものへ衝動 的に手を振り出すこと がある。(3) は：ボールを転がすこと ができません。 こ：ボールを転がすこと ができません。	国	算数	理科	体育
			3	3	4	2
			3	3	3	2
			3	3	3	2

記述評価にて具体的な行動の様子や学びの変化、課題点などを挙げる

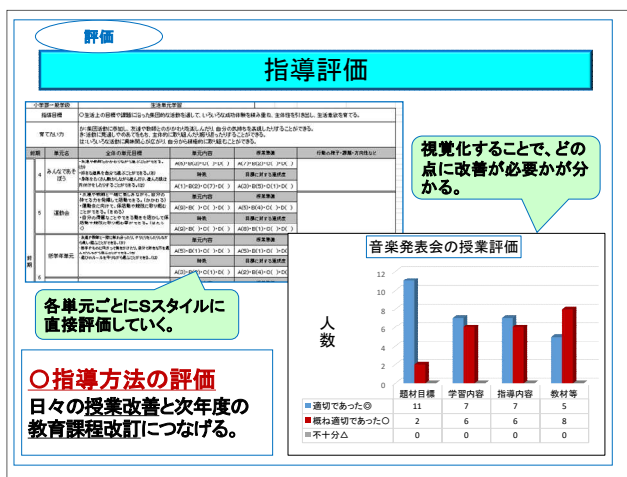
学年・氏名	個別目標	支援・配慮点	授業単元の学習評価			
			国	算数	理科	体育
5年 Bさん	か：友達や新学年にかかわりなが ら、全校大会の応援に積極的に 参加することができる。(3) き：手のひらを使って大玉を転が すことができる。(2) こ：連続して、カートの目 線を見て自ら走り出し、最後まで 走り続けることができる。(4)	は：はたきをはき忘れた り、靴紐がほどけたまま で授業に参加する。 こ：カートを走らせるときは 足で踏まないように注意す る。 は：カートを走らせるときは 足で踏まないように注意す る。 こ：カートを走らせるときは 足で踏まないように注意す る。	国	算数	理科	体育
			3	4	4	2
			3	4	4	2
			3	4	4	2

数値及びグラフにてどこまで「育てたい力」を育めたかを可視化する。また、どの部分が育めなかったかも明らかにし、次の授業につなぐ。

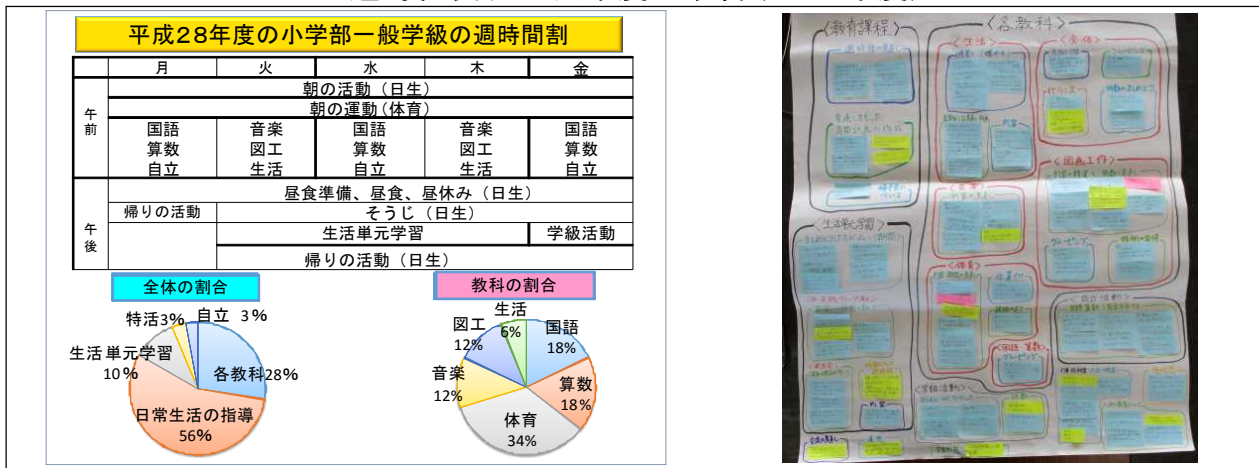
指導略案及びSスタイルに授業後直接書き込み、「題材目標」「授業内容」「授業時数」「教材等」などについて数値と記述にて入力し可視化できるようにしました。これにより、どの部分に改善が必要か分かりやすくなり、次の授業そして次年度の教育課程改善につなげることができました。

Ⅱ Action (改善)

Sスタイルを軸として、計画から評価までを繰り返し循環させたことで、次年度の教育課程を教師全員で検討する流れが定着し、平成28年度は改訂した教育課程をベースに子どもたちの「育てたい力」の育成を図ることができました。また、評価と併せて、ブレイン・ライティング法のミーティングにより平成29年度に向けた教育課程改善への道筋が見えました。



週時程表及び次年度の改善 (H28年度)



(3) まとめと今後の方向性

Sスタイルの活用により、指導内容が明確となり、年間を通して各授業が系統性、発展性のあるものになってきています。子どもたちにとっては学習の時間軸が定まり、めりはりをもって授業に臨む態度が高まっており、「育てたい力」が育まれてきていると確信しています。また、「いつ、何をねらい・何を教えるか・何を育てたいか」というARA・SHIの教育プログラムの構築に向けて、子どもの教育的ニーズに沿った教育課程の編成へのPDCAサイクルが循環し、そして、教師アンケートにおいても高い評価を受けており、Sスタイルの実用性が示されました。ただ、評価の円滑なシステムと教師の負担軽減においては課題が残っています。これまで見えなかった課題を可視化できたことも大きな成果と捉え、今後もSスタイルを軸にARA・SHIの教育プログラムの構築に向けて取り組んでいきます。

Sスタイルは授業づくりに有効か

